

Title	中国語劇を演じるに当たって：過去二年の実践から
Author(s)	夏, 嵐
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69981
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

中国語劇を演じるに当たって

—過去二年の実践から

夏 嵐

平成 28 年に、同じクラスを週二回の授業「中国語初級」、「国際コミュニケーション演習」で担当することになった。何か効果的で尚且つ学生が自主的に参加するような授業ができないかと考えたところ、同部会の先生の提言を受けて、「国際コミュニケーション」の授業で、中国語劇を演じることに決めた。これまでは、他大学で、中国言語・文学専攻の二年生以上を対象に、中国語劇を演じさせたことがあるが、一年生とははじめての試みである。

決めてはいたのだが、具体的な作業に入ろうとすると、予想もしない多くの問題に直面してしまうのである。その多くの問題をなんとか解決し、上演に漕ぎ着ける過程はとても有意義な体験であった。次の平成 29 年も、同じような授業を担当し、授業の最終発表内容について、学生にアンケートを取ったところ、半数以上の人が前年度と同じ、中国語劇をやりたいというので又劇の上演を決めた。(残りの人の発表は中国語による詩・詞の暗唱であった。)二年連続して中国語劇の上演を行ってきたが、ここでは、平成 28 年を中心に、脚本選びから上演に至るまでの過程を振り返ってみたい。

受け持ったクラスは一年生のクラスで、全員、中国語学習歴ゼロで、いわば、ゼロからスタートするクラスである。もちろんのこと、発音、文法、語彙などの勉強を最初からやらないといけないし、目指すところは劇の上演である以上、とりわけ発音は一定のレベルに達していなければ、劇の内容をうまく伝達できないので、発音練習の徹底をしないと最初から学生に周知させた。三十数人のクラスなので、語学の学習にしては少し人数が多いのだが、ほとんどが勉強に熱心な学生であって、文系で基本、言語の勉強に興味がある人なので、それほどやりにくいとは感じなかった。

週に 2 回の授業を行うので、やる内容の面では呼応させることができた。「中国語初級」の授業では、主に新しい内容を教え、「国際コミュニケーション」ではその内容のフォローと発展をやるようにした。具体的に、「国際コミュニケーション」では「中国語初級」で習った文法、語彙を使って、繰り返して発音と作文の練習をするのである。一学期は、特に正確な発音に力を入れてみた。一般的に中国語の発音は難しいとよくいわれるが、その一因は「四声」という声調があるからだと思われる。「四声」とはイントネーションのことで、四つに分

けられて、声調の抑揚によって漢字一つ一つが区別され、意味が特定されていくものである。その中で、特に第三声は面倒くさくて変調が起り、三声と表記されても置かれる場所や前後の漢字の発音などに応じて正しく声調を変えないと、聴き心地のいい響きにはなれない。学生達はさすがにこの発音にひっかかることが多かった。一応、ルールのような規則があるが、ルールそのものを暗記させるよりは会話や音読を通して、生の響きを確かめてもらおうと考え、あくまで声を出して読むことにこだわった。全員、この読み方を上手にクリアしたとは言えないが、繰り返して練習したことは、後の劇セリフ喋りにプラスの影響を与えたと思う。声調のほかに、巻き舌音も難しい所で、日本語にない発音どころか、中国の人でも、南方の人でうまく出来ない人が多いので、たくさん練習が必要である。これについても、慣れるのに時間がかかったのだが、練習の甲斐が後のセリフ喋りにも反映されている。

一、二例だが、とにかく一学期は劇のことには触れず、ひたすら発音の徹底を図っていた。それと同時に、文法や語彙なども毎週、習っていくので、中国語に対して少しずつ馴染んできてもらった。10月の二学期が始まる時点では、学年開始時と比べられないほど、ほとんどの学生は発音がだいぶしっかりとなり始めた。いまで考えると、もう少しクラス単位で発音の練習をしておけば良かったかもしれないが、劇の上演時期ができるだけ学年末の試験期間とぶつからないようにと予定していたので、早速劇の準備に入った。これによって、一学期の発音訓練の徹底ぶり比べれば、練習は若干疎かになったのではないかと今では反省している。

劇の準備に入ったとは、脚本読みを始めたことである。そもそも学生たちの意向だと、劇は二、三本立てで、違う班でそれぞれを演じる。自分が緊張しながら演じることもあれば、他人が演じるのを見ることもできて、いい勉強になるというのである。大変理想的だが、現実的には実現しにくい。結局、劇は一本化にし、全員で一つの劇を完成させることにした。次は、どのような戯曲にするのかというのである。今回の場合、多幕劇は不向きだとは明らかで、規模を抑えた一幕ものに決めた。しかし演劇をするという以上、劇らしくて面白いものを演じてもらいたいと「欲張った」のである。結局、宋春舫の一幕もの『一幅喜神』（邦題『深夜の駆け引き』）を選定し、第一歩はその戯曲を読むことから始まったのであった。

宋春舫（1892～1938年）は、中国話劇史上つまり中国近代劇史上重要な理論家、劇作家で、特に早期話劇の建設に当たって、ヨーロッパ演劇理論の紹介、欧米劇作品の翻訳などの面において大きな役割を果たした。彼のヨーロッパ演劇に関する蔵書は当時ではアジア最多と言われていた。若いうちに亡くなったので、劇作品の創作はそう多くなかった。『一幅喜神』は彼の少ない創作の中の

一つで、一幕物だが、大変面白くて、ウィットに富んだ作品である。

有名な骨董品収集家ミスター李が深夜、妻とパーティーから帰宅すると、空き巣に入った泥棒と鉢合わせる。しかし泥棒は意外と落ち着いていて、逃げようとしないう。会話が進むと、状況が次第に明らかになってきた：骨董に関する知識が豊富な泥棒は部屋中を物色したのだが、すべてが偽物か価値のないものだという。ミスター李が後悔しつつも怖くなってきた。このウンチクな泥棒の「仕事」は毎回新聞に載せられるくらい注目されており、何も盗まれないことは即ち収蔵品は価値がないことを意味し、社会に知られたら自分が面目丸潰れとなってしまふからだ。夫婦は一つでもいいから何かを取っていってくれと頼むが、泥棒はその懇願を固辞する。たまたまそこにあつたミスター李の先祖の肖像画、通称「喜神」が気に入ってもらって、狂喜する夫婦はしきりにお礼を言つて喜神を差し上げて、泥棒を送り出したのであつた。

この劇の面白みは、特に会話にあり、絵画、演劇、哲学、書画など多くの面に触れる雅な会話にあると思われる。深い教養のある作者だから、内容が劇的に変化に富んでいて、会話が人を引きつけて、所々、会心の笑いを誘うのである。実際その会話を聞いて、単にストーリーを楽しめるだけではなくて、知識も得られるという一挙両得の戯曲である。しかしその該博な会話は中国語を習つて間もない学生にとって「諸刃の剣」だとも言える。典故や固有名詞などがたくさんある分、喋りづらいのは事実であるからだ。とはいえ、劇らしい劇にしたい、面白い劇にしたい、学生たちの可能性を信じたいという思いで、難しいとは知りながらも、あえて『一幅喜神』を選ぶことにした。

脚本読みは時間のかかる仕事だつた。第一、一学年の二学期の時点では、習つた文法はまだ基礎的なもので、劇の脚本を読めるレベルには達していない。このため、解説するのに必然的に時間がかかる。実際、一回の授業では何回も未学習の文法表現に出くわすのだが、逐一説明していけば、とてつもない時間がかかってしまうので、毎回汎用性の高い二、三ポイントを選び、それらを比較的詳しく解説し、それ以外の箇所は特に文法の説明を加えないで、セリフの意味だけをわかつていければいいようにした。幸い、前も言ったように、週に2回授業をするので、もう一つの授業では再び解説をしたポイントにふれ、それに纏わる練習もすることができた。このようなやり方を通じて、脚本読みを進めた結果、新たな文法の勉強もできた。

第二、百年近く前に書かれた作品なので、脚本に使われる表現、言い方など

の中には、今では使わない、あるいは使ってはいるが異なる書き方になっているものが少なからずある。せつかくセリフを覚えてもらうから、今も使える表現を同時に知ってもらった方が今後の為になると思ったので、できるだけ両方の使い方の説明をした。これは時間の要する作業で、これによって授業内容の量が増えてしまったが、現代中国語の発展、変化する実例が見られるいい機会だったと言えよう。

第三、年号や典故、固有名詞などが多いのはこの脚本の特徴である。それらを展開させて話をすれば劇そのものをもっと立体的に理解できるし、劇以上の知識も得られる。その中で特に、中国の伝統演劇、書画と骨董に関する会話が多くて、その会話の背後にあるものを説明したり、中国の伝統演劇のDVDを見せたりすることを最初、考えたのだが、時間の関係でかなり割愛をして、簡潔な説明にとどまった。

主に以上の原因で、脚本読みに時間がかかった。学生達は翻訳と説明を聞きそれを理解しようと一所懸命ついてきてくれた。そして概ね慣れた所で、具体的に言うと脚本の半分の所から、脚本読みのやり方を変えて、ローテーションで学生に翻訳してもらうことにした。一年生にとっては極めて難しい仕事だとわかるが、辞書を調べる習慣、辞書に書いてある用例をよく読む習慣を少しづつ身につけてもらおうと、敢えてこの難しい課題を出したのである。翻訳の発表は一人少なくとも一回、多い人は2回の具合で行われ、結局全員が翻訳に参加し、実際に辞書を手にとって調べることを体験した。このような過程を経て脚本読みが終わったのは12月の下旬で、思った以上に遅れてしまい、本来なら上演を予定していた時期であった。しかし、脚本読みの約2ヶ月間は、極めて内容の濃い2ヶ月間で、根気よくついてこられた学生なら得るものが多く、充実に過ごせたと信じたい。

一方、教える側も学生側も、熱心に読み込みに力をいれたことで、これまで通りに声を出して発音の練習をする余裕が大分なくなった。その直後に始まる2週間ぐらいの冬休みに期待をかけて、休みの間に発音の練習をするよう呼びかけたのだが、休み明けて聞いてみたら、実行した人が少なく、効果は今ひとつだった。結局、劇の練習は年明けてから始まることになり、上演時期も1月末にずれ込んでしまった。

A組とB組に分けて、各個人の意向も聞いた上で、役分担を決めた。セリフの多い泥棒役とミスター李の役は5人に、セリフが比較的少ない李夫人役は3人に分担して演じることにした。そして裏方の仕事、例えば脚本の日本語訳の整理、中国語発音（ピンイン）の表記、小道具の準備、連絡などの仕事をする人

もそれぞれ決めて、みんなで力を合わせて一つの舞台を作り上げて行こうと激励した。さていよいよ劇の練習を始めるが、早速セリフが難しいことにぶつかり、とりわけ前に言及した年号や典故、固有名詞などが読みづらくて、引っかかる人が多かった。このままだと、かなりの時間をかけて練習をしない限り改善の可能性が低いので、一つの決断をした。それは一人一人の学生の発音を確かめて、引っかかる箇所を特定し、劇のストーリーに影響をきたさないならば、そのセリフを削除してしまい、中国語をスムーズに話してもらうことである。逆に、特に困難を感じない学生なら、削除をしないか少なめにするかで、話せる分まで話せる。これで同じ役でも、喋るセリフの量は組によってあるいは人によって、多少違ってくるのである。この作業のおかげで大きな障害を取り除いたことになり、学生たちも大分安心して落ち着き、覚えるのに専念した。

セリフを覚えて流暢にしゃべることは第一歩であった。驚くことに、これをわずか一週間ぐらいで達成した学生が何人かいた。しかも発音がきれいで、句読も正確で、とても中国語を習ってたった数ヶ月しか経ていないとは思われないほどの発音であって、どれだけ努力していたかと想像できる。教える側としても尊敬の念を抱くのである。

次は出来るだけ演技をするようにしてもらうことである。学生のうち、一人二人は嘗て高校時代学生演劇部に所属していた、あるいは演劇に興味があるという以外は、ほとんどの人は演劇が初めてで、しかも外国語である中国語による演劇であるため、難易度は高い。実際に稽古をやってみると、演技をしようとするが、セリフを忘れてたり、発音がおかしくなったりして、結局演技をするところではなくなる人、中国語を正確に喋ろうとそればかりに気をとられてしまい、セリフを棒読みして何の演技もしない人、一人練習ではできたが、皆と合わせると緊張してあがってしまう人、などなどのハプニングが続出し、なかなか一、二回の稽古で本番に臨むことができる状態ではないので、やむを得ず、上演時間をまた遅らせることにした。すでに学期末で、学生たちは皆期末試験の準備をせねばならない時期だったので、調整には大変苦労した。いっそのことと、試験期間の最終日の4限(2月10日、金曜日)に本番上演と決定した。後で知ったのだが、実は次週の月曜日にも試験がある人もいた。しかしここまで来たらもう変えられないので、そのまま進むしかなかった。

厳密に言うと、リハーサルの回数が絶対的に不足だった。しかしもう時間はない。事実、リハーサルがたりないまま本番を迎えたのである。本番開始15分前に起きたことは、さらにみんなの不安をかきたてた。順番として2番目に演じるB組の数人の学生から、5限に試験があり、決まった順番だと次の試験

に間に合わないかもしれないと告げられた。まさに緊急事態だ。急遽、順番を変えることにして、B組を先に登場させた。着替えも終わったA組の学生、少し余裕の気持ちでいたB組ほかの学生、誰にとっても思わぬ出来ことだったので、動揺は大きかった。

チラシは数日前から配ってはいたが、限られた数枚しか配っていないし、また試験期間最終日の午後という要因もあって、観劇に来てくれたお客さんは多くはなかった。それにも拘らず、いざ本番になると、学生たちは緊張した。特に演じる順番が変えられたことで、緊張感が更に高まった。顔が真っ赤になる人、声が震える人、汗が出る人、学生たちの緊張する表情を見て、こちらもリラックスさせるような言葉がなかなか見つからない。少し時間が経ち、ようやく落ち着きが戻り、開演は時刻通りに始まった。

実際、本番の上演においては、パーフェクトに役をこなした人もいれば、あがってセリフを言えなくなった人もいた。そしてつい前日のリハーサルまではセリフをうまく言えなかったが、本番では上手にできて、ほっとする人もいた。本番で何が起こるか分からない部分は確かにある。一方、本番で露呈した一番目立つ問題はやはり前から心配していたものであった。

それは発音が十分に正確ではなく、意味の切れ目の区分が不適切だった問題である。もちろん全員ではないのだが、傾向としてこのような問題が見られたのは事実であった。その結果、確かに中国語らしきものを話しているようには聞こえるが、不正確のせいで、何を話しているのか聞き取りにくく、分かりづらかった。劇とは演技の部分も重要だけれども、セリフを持って劇のメッセージを正確に伝えなければ、演技も依るところがなくなるのである。つまり演技以前の問題で、セリフそのものの正確性が欠けていた。

振り返ってみれば、このような問題がおこるとは、ある程度予測していた。本来なら、それを防ぐ手段を講じるはずであった。その手段は、少なくとも二つある。一つは、一人の学生で演じる分量を変えないで、もっと練習時間をとることである。もう一つは、時間が限られていたため、一人で演じる分量を少なめにすることである。しかし、言い訳に聞こえるのだが、一つ目の方法については、1月中、下旬の時点では、練習時間を作るのが至難の業であった。これでも授業時間以外に、余分に2時間練習をした結果であって、推測だが、たとえば後一ヶ月の練習時間があれば、出来具合がよくなるのではないかと思われる。一方、一人一人の演じる分量を削ろうと考えてはいたが、あまり頻繁に入れ替え過ぎると、劇らしくなくなってしまうし、そのうえ時期的にも、いまさらもう間に合わない、結局決断ができなかったのである。今考えれば、学

生の負担が大きいと判断した時点で、迷わずに、直ちに分量軽減を実行すべきだった。

かくして中国語劇を一年生の授業で演じ終わって、考えさせられることが多く、以下のようにまとめてみた。

1、中国語劇をやるには2年生でやるのが理想的だが、1年の時にやるなら、十分な練習時間を確保せねばならない。中国語劇を演じるのは難しいが、十分に練習をしておけば、多くの学生がこなせるに違いない。今回は、1年生で、実質10ヶ月しか中国語を勉強していない人でも、一定の割合で正確に流暢にセリフを話すことができた。しかし全体のレベルを向上させるなら、今回のようなタイトなスケジュールではなく、また早い人だけを見るのではなく、少なくとも中間ペースに合わせて、多めの練習時間が必要である。

2、限られた授業時間数の中で、練習時間を確保するのが難しいので、決断の必要なところはちゃんと決断すべきである。劇らしさを取るか中国語発音の正確さを取るかと、迷いもあるが、授業で中国語劇をというコンセプトから考えると、やはり中国語のセリフを正しく話すことが第一だと思う。このため、学生一人一人の状況を把握し、ペースの早い人、ゆっくりの人など、各個人に合うセリフの量を分担させるのがいいのではないかと思われる。つまりセリフを均等に分けることにこだわらなくてもいいのである。

3、1年生で中国語劇をやるのが大変だが、プラスの効果が大きいと思われる。確かに単語の量もまだ少ないし、文法も基礎的なものしか習っていないのだが、一、二回ではなく一ヶ月余りも読んで、苦勞して覚えたセリフは身にしみ、いつか自分の言葉になって使えるだろう。中国伝統の教育方法の一つに、五、六歳の子供に意味がわからないままも、ひたすら古典などを暗記させる方法がある。理解を前提とする今の教育方法とは大きく異なるが、言葉の響き、リズムなどは覚えることによってごく自然に体に入り、体の一部となって、そのうちこれらの言葉を自由に使えるようになるのが確かである。このような教育を受けて育った人は、内容の理解は大きくなると自然にできるし、小さい時に覚えたものは一生忘れられることがなく、ずっと使えるという。1年生で中国語劇をやることは幾分これに似ていて、難しいセリフの暗記は中国語を覚えるのに大きく役立つだろうと思う。

1年生で中国語劇をやるのは今回がはじめてで、参考にできる資料がない中、上演日時に近づくとつれ、学生と共に緊張感が高まり、かなりストレスを感じたのは事実である。特にストレスと感じたのは時間不足の問題で、絶えずセリフを覚えたのか、正確にセリフを話せるのかと気になっていた。幸い、有能な

学生たちが努力した甲斐もあって、上演はなんとか無事に終わる事ができた。今後の中国語教育の為にも、今回の試みで得られた経験と教訓を如何に生かし、もっと効果的な方法を見出すかは課題であり、真剣に取り組んでいきたいものである。

その後、学生達に中国語劇を演じる感想を求めた。以下、ご参考までに、一部抜粋して載せておく。

①役を決め終わって最初に自分のセリフを見た時は「多すぎるし覚えられない」と思いましたが、いざ始めてみると授業で習った言葉が何個も使われていましたし、意味が分かっていると中国語でも考えやすかったので割とスムーズに覚えられました。頑張っただけに、本番緊張のあまり少し間違えてしまったことが残念です。・・・リハーサルをもっとしっかりできていたら良かったです。色々苦勞もありましたが、皆で頑張るのは楽しかったですし、最後のAグループが終わって拍手をしたときとても達成感がありました。

②劇本番の前段階として、台本のピンインと訳を分担してやっていましたが、その段階に時間がかかりすぎているように思います。もう少し尺の短い作品を使うなどして、ピンインと訳よりも実際の本番を想定した口頭練習や舞台に立っての練習に時間をかけた方がより完成度の高いものができるのではないかと思います。また、物語の背景知識が足りなかったことで話の内容がつかみにくく、訳をしてもいくつかある意味の中からどれを用いればいいのかがわからなかったり、文法事項に気づかず誤った訳をしていることが多いように思ったので、主な内容や重要な文法事項は事前に教えていただくとより理解が深まると思います。

③泥棒役をした感想は、妻や夫と比べて台詞が多いなあということです。今後は、台詞の長さは夫以上、泥棒未満が適切ではないかと感じました。また、大変ではありましたが、単語や構文を自然に覚えることができたので、授業やテスト勉強が楽になったように感じます。私も、こうして頑張ってきたことは無駄ではないと実感しています。

④演劇についての率直な感想は面倒であった。内容のわからない中国語を覚えるほど苦痛なことはなかった。しかし、自分の役が決まり、覚える範囲の中でこれまで月曜の授業で習った文法事項が出てくるたびにこれまでの知識が生かされていてうれしくなった。もっと文法事項が定着した段階で劇をするべきだと思う。

⑤今回の演劇では、台本を全員で和訳し、ピンインをつけていくところから始めたということから考えると、最後の発表はみんなの努力の成果と言えるの

ではないかと考えます。和訳では、自分が知らない単語も文法事項もたくさんあって本当に難しく、辞書を使ってなんとか訳すことができました。その後、それぞれの役が決まって、台詞を覚えるのは非常に大変でした。台詞を覚えるのに精一杯で十分な演技はできませんでしたが、初めてあの量の中国語の台詞を覚えたことはとても良い経験になり、それぞれの漢字のピンインを覚えやすくなったと感じました。この演劇は普通の座学よりも楽しく、深く学ぶことができ、本当に良い授業でした。

⑥第二 Semester 通して中国劇に取り組んだ感想としては、内容の把握に時間がかかりあまり練習できなかったということです。まだ習った文法が少ないためスムーズに訳すことが出来ませんでした。内容が面白いものだった分、もう少し内容の把握が出来ればよかったなと思いました。また、その分練習期間が減ってしまい、演技とまでいかなかったのが少し残念でした。しかし、自分である程度の分量を覚えていくというのは自信になりました。

⑦中国語で劇をすると聞いたときにはここまで本格的な台本とは思っていませんでした。日本語訳の予習が大変でした。配役については、先生に「独裁的」に決めていただいたことは、練習に早く取り組めたので結果的には良かったです。試験期間だったので仕方ありませんが、劇全体を通しての練習をもう少しやりたかったです。自分の台詞を言うタイミングが分からないことが多かったので、自主的にも他の人と一緒に練習すべきだったと反省しています。大泥棒の役はもうやりたくありませんが、終わってみると達成感もあり、楽しかったです。

⑧最初、劇をやると思った時、無謀だと思いました。まだ中国語を習いたてで、文法も語彙もほとんどマスターしていない私たちが数か月後に劇ができるとは思えなかったからです。しかし、終わってみれば、思った以上に劇が形になってよかったです。嬉しい、というよりホッとしたというのが正直な感想でした。いつまでに〇〇をするといった具体的な計画を予め考えておく必要があったと思います。年始から突然忙しくなり、テスト期間中に劇の台本を覚えるというのは大変そうでした。そして、誰がどの役を、どの部分を演じるのかを早い段階で決めておく必要があると思いました。最終的にやってよかったと思えたのでまたやっていただきたいです。

⑨劇はとても難しかったです。セリフが長いことや量が多いことだけでなく、知らない文法や単語がたくさんあることから、セリフを覚えるのに時間がかかりました。しかし、覚えるには文法を理解したり、単語を覚えることが必須だったので、特定のものですが、文法や単語をしっかり身につけることはできた

と思います。また、日本語は言葉を覚えるだけで伝わるが、中国語はピンインも覚えないと伝わらないという点で、言語の違いを感じることができました。

⑩個人的にはかなり大変でした。他の教科のテストやレポートがある中で、この劇の準備（暗記等）にかけた時間は他とは比べものにならないほどでした。単語や文法が未熟な段階では相当無理があったように思います。本番の出来も本当に個人差が出てしまっていたと思います。一方でよかった面は、たくさん発音などを練習したかいがあって、中国語を読むことに慣れたことです。また、中国語に親しくなったような感じがして、月曜の筆記テストの勉強の際にはなんとなく楽に覚えることができたように思います。

⑪今回国際コミュニケーション演習中国語で通常の座学からは離れて中国語の劇をするということで、授業を通じて一文一文みんなで訳していく過程で習ったことのない文法や単語がたくさん出てきて正直難しいなど感じることも多々ありました。しかしそうした演習のなかで中国の日常会話で使われる言葉の表現や中国の方が前提としている常識、考え方などが文章の中から感じられて、普段の文法や単語を学ぶという授業を越え、もっと大きな中国の全体像を、大まかながら掴めた気がします。またクラスの生徒と1つのものを作り上げるという、大学生活ではなかなか経験することのできないことが出来て終わったあとは充実感と達成感を得ることが出来ました。

枚数の制限で、平成29年の発表の紹介については極簡略にとどまりたい。前年度学生の意見を参考に、比較的短い一幕物『芸術家』を選んで、和訳を付けた。ピンインは学生に調べさせたのだが、和訳がある分、解説にかかる時間を練習に回すことができ、年末の上演で学期末の忙しい時期が避けられた。

しかし練習時間はやはり不足であった。そもそも中国語の学習時間が短く、授業外の時間で練習しても集まりが悪いので、とても満足のできる練習とは言えなかった。これは前回と同じ問題で、工夫して今後改善すべき所である。一方、学生達の作品の読解力の素晴らしさに感心した。短い作品だが、多種多様な読み方をしてくれて、新鮮で興味深かった。苦勞した学生達も今回中国語劇を演じることによって、得るものが多いと信じたい。

繰り返しとなるが、一年次の学生に中国語の劇を演じさせることは大変難しいけれど、学生にも教師にも有意義なことであるので、引き続き有効な演じ方を模索したいと思う。